

新々人類の登場!?

貴家 和江

日赤医療センター褥瘡科長

最近、勤務中に起きたことをお話ししたいと思います。

スタッフが「婦長さん、20号室の患者さんがお部屋のことで相談したいと言っています。よろしくお願いします」と言ってきました。患者さんは仮にAさんとしましょう。

なんのことかと思いつつ20号室に出向きますと、Aさんは「婦長さん、同じ部屋の帝王切開後のBさんが夜中にも授乳するので、電気がついて、その都度、私も目が覚めて眠れなくて、イライラしてお腹が張ってしまうので、Bさんをどこか別の部屋に移してくれませんか」というのです。

私は、思わず「エー!!」と開いた口がふさがりませんでした。

Aさんは高齢初産婦で、妊娠中毒症の管理目的のために入院、近々帝王切開予定になっている患者さんです。自分がイライラしてお腹が張るので、「自分の部屋を変えてほしい」という希望なら、わからない訳でもありません。今までも、どうしても同室の人と相性が合わず、自分の部屋を変えてほしいという希望はありました。しかし、相手の部屋を変えてほしいという希望は、ここ2〜3年のことです。Aさんにはとりあえず、Aさんの今の状態や入院の目的、そして観察が必要なのでナース・ステーションのすぐ近くの部屋にいることなどを説明し、そのあとでBさんの今の状況も話し、Bさんが落ちついたなら、褥瘡さんたちの部屋に移す予定であることを話し、ひとまず納得してもらいました。

快適な入院生活はむずかしい?

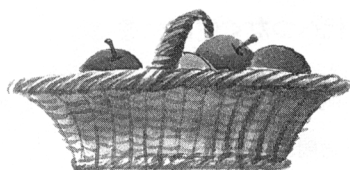
早速、当日スタッフとカンファレンスを持ち、Aさんの一件を話すと、スタッフも「エー!!」という驚きの表情でした。

わが病棟は、4床1部屋が48床と、個室5床の計53床の産科の単科病棟で、Aさんのいる部屋は、帝王切開予定の人や、術後の人、緊急性があつたり要観察の人などが入院する部屋です。

確かに、患者さんの側からいえば、快適な入院生活を要求することも当然の権利で、快適な生活の場所を確保するために、主張するのもわからない訳でもありません。

施設の中の限られた空間で、患者の思いどおりにならないことは、しばしばあると思います。都内の、ある病院のようにすべて個室というのなら、Aさんのような発言はないかもしれません。しかし、個室に長くいる患者さんが、同じ妊婦さんと交流がなく、個室から大部屋に移ることを希望して、移ったあとで自分だけが些細なことで、悩んでいたわけではないとわかり安心し、「なによりも情報交換ができ、とても楽しい」と言っていた例があるので、必ずしも個室がよいとは限らないとも思います。一長一短です。

カンファレンスでは、「Aさんも、いずれ手術をして、同室の人に対し逆の立場になるのだから、Bさんに移して、Aさんの思いどおりにすることはない」とか、「Aさんもわがままで、Bさんとお互い様だ」とか、「イライラして、お腹が張るとい



った身体症状がでてきているので、Bさんを早急に移した方がよいと思う」など、いろいろな意見がでました。結果としては、当面は、Aさんが十分睡眠がとれ、自分の言動にも気づくよう働きかけたうえで、イライラが落ちつくように、Aさんの話を傾聴しよう、という計画をたてました。

しかし、そのあとAさんの部屋の件と似たようなことが続き、考えさせられてしまいました。

どんな子育てをするのかしら

続いて起こったのは、高齢の初産婦さんと、30代前後の患者さんの部屋でのことでした。お互いに話題の共通性が見いだせないし、高齢の初産婦がいるために、部屋の雰囲気がかわるので、その高齢の初産婦さんを別の部屋に移してほしいということでした。

最近では母親学級も、話題の共通性を見いだすために、年齢別のグループで構成しているクラスもあると聞いてはいますが……。

個室を与えられ、ある意味で自由奔放に育てられてきた世代の人たちが、食事の時にお互いに背を向け、お膳に向かっている姿を見ていると、さびしいものを感じます。

自分のことばかり考え主張する姿は、今の子ども達とどこか似ています。相手のことを考えられない、思いやれない、自分さえよければ他人はどうでもよいという態度は、「いじめ」に近いものがあると思います。

このような妊婦さんたちがお母さんになって、

子どもを育てていく時代になってきている現実を、今さらながら痛感してしまいました。

今、これから、わたしたちは

これらの話を、あるとき、日赤看護大学の樋口康子学長に話しをしたところ、こうした事実には驚いていらっしゃいました。昨今は、私たち看護職の仕事に隣接し、看護領域に入ってくる臨床心理士やケース・ワーカーなどのさまざまな職種があります。しかし、その中でも看護職が一番患者の身近な存在で、患者の立場に立って考えることができます。だからこそ、この現実を看護職がお互い共有し、これからの子どもたちを育てていく母親の環境について、考えていく必要があります。そうしなければ、私たち看護職が、ほかの職種に侵されてしまいます、と話されました。

世代が交代し、環境や教育が変化する中で価値観や考え方も、同様に少しずつ変化してきていることを、あらためて認識させられます。

予想や想像もできないさまざまなことが起こりますが、ただ驚いてばかりいられない時代が、やがて到来するのでしょう。

頭も心も常に柔軟性をもって、相手の行動を理解し受容できるように、ひとつずつ経験を積み重ねていきたいと思います。そして、一番身近にいる私たちが、時代や世代の微妙な変化に気づき、相手を考え、思いやるということを養える母子の環境を作るには、どうしたらよいか悩んでいる今日この頃です。